

氏名(本籍)	きむ	き	すく	淑(韓国)
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博甲第938号			
学位授与年月日	平成4年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当			
審査研究科	歴史・人類学研究科			
学位論文題目	インド西ベンガルのポトゥア・ジャーティにおける宗教的作為 ——ストラティジーとしてのダルマ——			
主査	筑波大学教授	文学博士	綾部恒雄	
副査	筑波大学教授	文学博士	宮田登	
副査	筑波大学助教授		小野澤正喜	
副査	筑波大学教授	文学博士	野口鐵郎	
副査	筑波大学教授	Ph. D.	荒木美智雄	

論文の要旨

本論文は、カースト制度によってヒエラルヒー的に構成されているインド社会の最底辺に生活するアウト・カースト集団の、生存戦略にみられる宗教的作為について考察している。インド人は生れながらにして、ジャーティとダルマ(宗教)という2つの集団に帰属している。ジャーティは内婚と共食の単位として、ダルマは主に礼拝と諸儀礼の様式の単位としてその役割を果たしている。ジャーティ集団の成員権は生得的なもので、基本的には一生変えることができないものであるのに反し、ダルマ集団の成員権は必ずしも生得的なものではない。したがって、生存戦略上、その時の有力なダルマを受け入れ改宗することによって利益を得ようとするストラティジーが働くことが往々にしてみられる。本研究は、一つの改宗ジャーティ集団を取り上げ、改宗がこの集団をどのように変化させているのか、またその限界はどこにあるのかについての考察がおこなわれ、ダルマが生存戦略としていかに操作されているかについて明らかにしている。

論文は7章で構成されている。第1章の序論においては「研究目的と方法」「調査地概況」に当てられている。前者では既述のような問題意識のもとに、現地調査による参与観察法と文献研究が併用されたことがのべられている。現地調査は、1987年8月～1988年8月(第1次)、1988年11月～1989年3月(第2次)及び1989年10月～1990年3月(第3次)の延べ24か月にわたって行なわれた。調査地は、南ベンガルのメディニプール県に位置するN村とC村のポトゥア居住区が中心となっており、この他にもメディニプール県の4ヶ村が補充調査された。第2章の「ポトゥア・ジャーティの民族誌」では、まずこのジャーティに関する理解を深めるために、彼らの生業、社会組織、人生儀

礼についてのべられている。第3章では、インドの著名な人類学者M. N.シュリニバスがインド社会の文化変容と社会的モビリティの重要な要因とみているサンスクリット化(sanskritization)という概念をとりあげ、その問題点を指摘している。さらに全インドを通して、サンスクリット化や改宗を行なったいくつかのジャーティ集団の実態を考察することによって、サンスクリット化の限界と改宗の意味が検討されている。こうしたインドにおけるサンスクリット化の限界と改宗の一般特徴を踏まえた上で、第4章「同一ジャーティ・異ダルマの二つのポトゥア集団」、第5章「ホラガイと安息香—ヒンドゥー化志向〉の神像造師」、第6章「二つの水jolとpani—状況主義に生きる絵解き師—」において、ポトゥア・ジャーティにおけるダルマと生存戦略との関係が考察されている。

C村とN村の二つのポトゥア集団は、生業形態、居住環境、経済状態、ダルマ、居住地域の歴史など、様々な面において違いを見せている。中でも特に異なる点は生業である。C村のポトゥアは、戸主のほとんどがヒンドゥー神像製作に携わっているのに対し、N村のポトゥアは、戸主総人口の59%が絵描き、68%が絵解きの仕事を行なっている。そして神像製作と絵解き・絵描きの仕事は、収入やクライアントの確保の面において大きな違いがある。ヒンドゥー神像は、毎年ヒンドゥーの大きな祭りがあるたびに、新しいものを容易しなければならない。祭りでは、一度祀られた神像は二度と使用しないからである。したがって、彼らはクライアントの確保にあまり困ることはない。他方、N村の絵解き師や絵師の仕事には特にシーズンはなく、ポト絵は一回性のものでないために、常にクライアントの確保が困難である。収入の格差から、C村のポトゥアの方がN村よりはるかに裕福である。

両集団の相違点は、さらに両集団のあり方の違いを生み出している。C村の神像造師の集団は、基本的には世帯別主義の上に成り立っており、神像製作の仕事も世帯内で完結し、相互に手伝うことはない。祭りも世帯ごとに楽しむ。これに対し、N村のポトゥアたちは、常に他の世帯のことやポト絵の販売口などに関心が深い。絵の販売に関わる情報は一人占めされず、交換が求められる。結婚式の後の供宴はほとんど義務化されており、これを破ったものに対する制裁は厳しい。このような両集団の違いは、さらにそれぞれの集団のダルマとの係わりにおける違いをもたらした。C村の神像師は、インド独立後、ヒンドゥー・ムスリムの激しい対立の波のなかで、1946年ヒンドゥー教へ集団改宗した。印・パ分離独立後に、インドはヒンドゥー国家となり、ムスリムは差別を受けるに違いないと思ったのである。生業を続けるためにムスリムであることをやめることによって、彼らの生活習慣、儀礼、結婚などが大きな変化を蒙った。他方、N村のポトゥアは、ヒンドゥーとムスリムの両義的な存在であり続けている。ヒンドゥー名とイスラム名の2つの名を持ち、状況によってどちらかの名前を用いている。行動様式は明白な宗教的アイデンティティに基づいておらず、状況主義的傾向が極めて強い。こうした傾向は、イスラムをダルマに持ちながら、ヒンドゥー聴衆の前で絵解きを行なわなければならない彼らの生業形態から来たものである。婚姻においても、ムスリムのように血族婚(イトコ婚)を行なってはいるものの、他のオーソドックスなムスリムに比べてその役割は低い。またヒンドゥーのようにオジーメイ婚やオーバーオイ婚は行なわない。

本研究では、インドの様々な厳しい環境の下で、社会的にも経済的にも力のない低位ジャーティ

集団が、自己防衛のためにダルマを手段として用いる例を、西ベンガルのポトゥア・ジャーティにおけるダルマと生存戦略との関係を明らかにすることによって証明している。インドの悠久の歴史の中で、今日まで残存している様々なマイノリティ集団の多くは、多かれ少なかれ、生存の方法なり、戦略なりをもっている。明白なアイデンティティを持って行動するのが、ある集団にとっては生存戦略であるかもしれないが、他の集団にとっては必ずしもそうとは限らない。これは、それぞれの集団の性格やあり方と深い関係にあると結んでいる。

審 査 の 要 旨

本論文は、従来とかく永久不変なものと考えられがちなインド社会の底辺にも、生存のためにストラテジーとしての宗教的作為が観察されることを実態調査にもとづいて的確に描き出しておりポトゥア・ジャーティに関わる本邦初の学術的論文として十分に評価することができる。インド社会のダイナミズムについてはM. N.シュリニバスのサンスクリット化という概念が従来定着していた。サンスクリット化とは「一つのロー・カーストが菜食主義と禁酒主義を取り入れ、儀礼とパンテオンをサンスクリット化することによって、1～2世代の後のヒエラルヒーにおいてより高い位置に上がることができる」ということであり、インド社会の社会的モビリティを理解する概念として重宝された。これに対して筆者は、第一にサンスクリットの習慣とよばれ、模倣的とされている文化要素は、そのすべてがサンスクリット古典期のものとは限らないため、この用語は不適切であること、第2に、サンスクリット化自体が個人や集団のモビリティをもたらしたものでないこと、第3に、サンスクリット化の内容を諸次元に分けて考えること、第4に、サンスクリット化の限界として改宗問題を考えること、などを問題点として指摘している。特に第4のサンスクリット化の概念の限界として、ダルマの改宗問題を摘出し、調査し、分析したことは貴重である。

しかし、筆者が意図した課題については、今後さらに検討すべき問題点がある。その第一は、筆者が調査したC村、N村などの集団が、インド社会の底辺を構成するアウト・カースト集団の典型ではなく、僅かな部分を占めるに過ぎないのではないかということである。ここから第2点として、シュリニバスのサンスクリット化概念に対する批判は、その相当部分が妥当であるとしても、ポトゥア・ジャーティ類似のジャーティ集団の調査を拡大しない限り、批判の力としては未だ弱体の感を免れないことである。第3に、筆者の行なった2つの村の比較が十全の意味での比較になっていないという点である。生業を異にする集団の比較をおこなったので、どの要素が優越的であるのかが明確に析出されていないといううらみもある。

筆者に残された課題の要点は以上の通りであるが、本論文は、延2年間にわたる現地調査に基づいた、ポトゥア・ジャーティに関しては本邦初の野心的研究であること、インド社会底辺のモビリティの現実を生き生きと描出したことなどの成果は十分に評価できるものであり、今後の研究の充実が期待される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。